



風

山脇 岳志

ワシントンから

ポトマック河畔にたたずむその桜の幹回りをはかると、2層あまりあった。

樹齢1000年を越すソメイヨシノとはみえぬ葉桜の勢いである。近くの銘板には、1912年、東京から贈られた最初の桜とある。

つい先日まで、4千本近い桜が咲き誇っていた。この季節には100万人を越す観光客がワシントンを訪れる。

「もともとは日本からの贈り物だと知っていますか」花見をする10人に聞いてみた。小学生から、若いカップル、おばあさんまで。メーン州やコロラド州など、遠方からの客もいた。

全員が知っていたので驚く。学校で習ったり、ホームページで見たり、知った経緯はさまざま。

ワシントンの今冬は、とり

「イメージ」外交 桜と靖国 揺れる日本像

わけ敵しい寒さだった。春の喜びを人々が味わうとき、すぐそばに日本がある。

◇ 「パブリック・ディプロマシー」という言葉がある。

その国の対外的なイメージ向上を目的とした外交のことだ。政府のメディアへの発信はもちろん、民間と連携した文化交流などを含み「対市民外交」とも呼ばれる。

世界中から人と情報が集まるワシントンは、各国のパブリック・ディプロマシーが激しく競り合う場でもある。

ワシントンの日本大使館の幹部は「桜は日本のパブリック・ディプロマシーの切り札」という。桜が咲くころ、大使はとりわけ忙しい。日本関係のイベントを渡り歩き、イメージアップを狙う。

中国は、日本を厳しくやり込め、自国のイメージを相対的に上げる戦略を取る。

安倍晋三首相の靖国神社参拝後、駐米中国大使はワシントン・ポスト紙に寄稿、A級戦犯がまつられる靖国への首相の参拝は「世界への挑戦だ」と批判した。靖国に関連して、約70カ国で中国の大使が現地の新聞に寄稿した。

米国メディアも、その影響を受けた面は否めない。安倍首相や日本に対する批判的論調が目立って増えた。

今のところ、各種の世論調査で、日本の国としてのイメ

ージ・好感度は、中国をかなり上回ってはいる。

他方、米国の対外イメージはあまり良いとはいえない。特にイラク戦争以降、中東での好感度は非常に低い。

米國務省のパブリック・ディプロマシー担当次官に最近、タイム誌の元編集局幹部が就任した。有力なジャーナリストを起用し、イメージの改善を狙う。

◇ 桜の季節には、ワシントンで「全米ジャパンプール」というクイズ大会も開かれる。

外国語科目で日本語を履修している高校生が集まり、日本についての知識を競う。今年40校が参加した。

会場を訪ねると、元國務省日本部長のウィリアム・ブリアーさんが、高校生たちの健闘に拍手を送っていた。妻のマーガレットさんはクイズの出題に携わっている。

ブリアーさんが最近残念に思ったのは、靖国神社の春季例大祭に合わせ、閣僚や約150人の国会議員が参拝したことだ。「戦死者を悼む気持ちに何の異論もありません。ただ、オバマ大統領が訪日する直前の参拝が、どう海外で受け止められるかも意識してほしかった」

「国のイメージ」をめぐる闘いは、今日も、世界中で続いている。

(アメリカ総局長)